

雨のヒメゴト：ガラにもない記念日

著者：玄野クロ

「あれ。何のケーキが好きだっけ……」

俺は仕事帰り、洋菓子屋に寄っていた。今日は早番のシフトで、彼女よりも早く帰れる。驚かそうと、ケーキを選んでいた。

今日は付き合って1ヶ月目。『記念日』なんて柄じゃあないが、自分にとつては特別な日だった。だって、大好きだった片思いだと思っていた女性と付き合えたのだから。

「こちらのタルトがオススメですよ。最近よく売れているんです」

「イチゴのタルトか……確かに、美味しそうですね」

「女性に人気です。あとは、このチョコレートのタルト。ガナッシュはサッパリしていて、くどくないんです。でも、ちゃんとコクがあって、こちらは私のオススメです」「なるほど……」

ショーケースの前をワロウロしている俺を見かねて、店員が声を掛けてくれた。実際困っていたからとて、有り難い。

フルーツの好きな彼女だ。イチゴのタルトは当たりだろ。しかし、この店員さんのオススメの、チョコレートのタルトも捨てがたい。艶々としたチョコレートも、こんがりと

焼けたタルト生地も、飾りとして盛られている生チョコレートとパリパリのチョコレート細工。先端の生クリームのアクセントも良い。形も初めて見る形だ。ホールを切り取つたものとは少し違う。それらが組み合わさつたのもあり、俺は惹かれていた。

「この、チョコレートタルトください。2つお願ひします」

「かしこまりました。お包み致しますので、少々お待ちください」

店員さんは慣れた手つきでタルトをトレイに乗せると、背後の作業台で詰め始めた。

「どなたかと一緒に召し上がるんですか？」

振り向いた店員さんが俺に聞く。

「あ、はい。その、彼女と一緒に。恥ずかしいんですけど、今日で付き合つて1ヶ月なんです。柄じゃないけど、でも、何かしたいなって」

照れ隠しに、頬をポリポリと搔きながら答えた。

「ふふふ。素敵ですね。きっと彼女さん、喜んでくれますよ」

「ううココと笑つてそう言つた後、また作業に戻つた。

「だと良いんだけどな」

サプライズなんて大したものじゃないが、彼女には内緒だ。少しだけ、驚かせたい気持ちがあつた。

こんなことをしようと思ったのは初めてだ。驚く顔と、喜ぶ顔が見たい。彼女の、口

口変わる表情が見たい。出来れば、プラスの方向で。そう思つた。

待つ間、ショーケースの中身をまた眺めていた。どのケーキも美味しそうだ。今回のチョコレートタルトが当たりだつたら、他のケーキを買いに来ても良いだろう。彼女と一緒に。

「お待たせ致しました。チョコレートタルト2点、お包みしております」

「有り難うございます」

「1ヶ月、おめでとうございます！ 末長くお幸せに。良かつたら、彼女さんとまた来て

「くださいね！」

「えつあつ、有り難うござります！」

『末長くお幸せに』なんて少々恥ずかしい。しかも、『彼女さんと』だなんて、自分の考えが読まれているようで、余計に恥ずかしい気持ちになった。思わず奪うように包みを貰い、背を向けて早足でその場を去る。

“うわー……顔に出てないと良いけど”

包みを運ぶ間、俺は彼女の反応ばかり考えていた。きっと、喜んでくれる筈。あの可愛らしい笑顔で「有り難う」と言ってくれるのだろう。想像しただけで胸が熱くなり、顔がにやけた。

ガチャツ　キイイ

「……ただいまー」

シン　とした空気が当たりを包む。やはり、彼女はまだ帰って来ていない。ここは俺

の家だが、殆ど半同棲状態だった。

生活が不規則で、不摂生な俺を見かねた彼女が、まるで通い妻のようにいつも見に来てくれるから。

その中で、料理に洗濯、制服のアイロンがけ、時間を見つけては、何でもしてくれる。これではいけないと、俺も自分で料理を作るようになつた。包丁も持つたことのなかつた俺が、米を炊いて味噌汁を作れるようになった。彼女のおかげだ。洗濯もあまり溜め込まなくなつた。山積みの洗濯物のある部屋に招待したくなかったし、畳んでもらうのも忍びない。

初めは甘えようと思っていた部分もあつたが、何も出来ない、出来るのにやろうとしたいのは恥ずかしいと、彼女といて思った。

今日もまずはタルトの包みを冷蔵庫にしまい、干していた洗濯物を取り込んだ。

「あ。何時に帰つてくるか聞くの忘れた……ってか今日もくるか聞いてないや」

一番大事なことを忘れていた。いつも来ることが当たり前になつていたが、今日本当に来るかどうかは聞いていなかつた。しまつた。これで彼女が来なければ、折角用意したタルトの意味がなくなつてしまつ。

【雨のヒメゴト：ガラにもない記念日】

「あー……メールするかあ」

「 ヴーヴヴ ヴーヴヴ

『噂をすれば何とやら、彼女からメールだ。

『わいつすぐ家着くよ。今日は早いんだったよね?』

良かつた。今日も来てくれるんだ。

「うん、もう家に着いてる。ゆっくりで良いよ、気を付けてね」

そう返し、俺は洗濯物を畳み始めた。その洗濯物が畳み終わる頃、家のドアの鍵の開く音がした。
「彼女だ。

「……お邪魔します」

「おかえりなさいー」

俺は急いで彼女を出迎えに玄関へと向かつた。靴を脱ぐ彼女の手には買い物袋。何かご飯を作ろうとしているらしい。

俺は買い物袋を貰い、もう一度「おかえり」と言つて、彼女の返事も待たずに唇にキスをした。

「取り敢えずしまつておくね

「有り難う。伊織が早いつて聞いたから、お昼に買いに行つて、会社の冷蔵庫借りて入れていたの。おかげで早く帰れて良かつた」

いつもの可愛い笑顔で彼女は言つた。何度見ても可愛い。飽きない。いつまでも見ていたい。食材をしまうのは今日は俺のしことだ。冷蔵庫の奥、ヨーグルトやケチャップ、味噌なんかで蓋をして、タルトを隠しているから。

彼女は荷物を置いて手を洗うと、置いてあるエプロンをしてキッチンに立つた。

「俺もやるよ

「そつ？　じゃあ、レンコンとナスとパブリカに、エビ取ってくれる？」

「りょーかい」

彼女のサポートもまた仕事。出来れば、食べるために出すその時まで気付かないでいて欲しい。今の俺のささやかな願いだ。

「仕事はどうだった？ 普段早番少ないもんね」

「うん、ちょっと人手が足りなくて。でも、今日は暇だったかも。そつちは？」

「そうね、少し忙しかったかな。でも、残業しないように頑張ったよ！」

他愛ない会話をする。いつも家に帰つて一人だった俺は、この時間すら愛おしいものになつた。家に誰かいることで、こんなに明るく華やかになるなんて。想像もしていなかつた。彼女だからこそなのかもしれないが。1ヶ月前の俺には想像もつかなかつただろう。

エビを焼く良い匂いがする。焦がした醤油と、ごま油の香ばしい匂いが鼻をくすぐつた。

「洗うのが面倒だよね」なんて2人で言いながら落ち着いたのが、このワンプレートディナー。木製の大きめのお皿に、ご飯、サラダ、メインを取り分けていく。

「はい、完成」

「美味しそう！ 早く食べたい！」

スープを注ぎ、プレートとスープカップをテーブルに運ぶ。彼女が持つて来た箸とお茶もセットして。

「「いただきます」」

口に広がるエビの風味。プリプリの食感と、香ばしい醤油の香りがたまらない。

俺は夢中に食べていた。どの料理も美味しい。万が一失敗したとしても、彼女が作ってくれる料理ならば、喜んで食べる。俺のために作ってくれたのだから。

いつものように会話を弾ませながら摑る食事も、いつもと違う部分があった。

それは、食べ終わった後。

「「駆走さまでした！ うん、今日も美味しかった！」

「良かった。お粗末さまでした」

「あ……まだ、入る？」

「ん？ うん、まだ少しなら
「あのさ、ちょっと待つて」

俺は食べ終わった食器をシンクへと片付け、冷蔵庫から例の包みを取り出して彼女の前へと置いた。

「なあに？」

その包みを見て、キヨトンとする彼女。その姿もまた可愛い。

ゆっくりと包みを解き、箱の中身が彼女から見えるように蓋を開けた。
「1ヶ月間有り難う。その、これからも宜しく」

恥ずかしくて、目を逸らしながら言った。

「……あ……」

彼の方をチラリと見る。口ものを手で押さえており、その顔は真っ赤だった。

「やだ、これ、伊織が選んだの？ うそ、嬉しい、有り難うー！」

彼女は俺に抱きつくと、頬にキスをした。

想像以上の反応だった。不思議に思つて俺も箱の中身を見る。

“これは。驚いた……”

箱の中のチョコレートタルトは、ピースを買った筈なのにハート型になつていた。あの不思議な形は、ハートをふたつに割つた形だったのだ。背を向けて斜めに置いてあったから、分からなかつた。そもそも、そういう目で見ていなかつたのもある。合わせるとハートになるだなんて。

そして、そのハートの真ん中。ふたつのタルトを跨ぐように、一枚のチョコプレートが置かれていた。これは、ショーケースのタルトには乗つていなかつたモノだ。

同じくハートで彩られたプレートの真ん中に【I LOVE YΟU】とチョコレートで書かれていた。……俺は頼んでいない。あの店員さんが、恐らく気を利かせて、もしく

はイタズラで書いたのだろう。

「可愛い！ これ可愛いて美味しそう！」伊織、本当に有り難う。私も、愛してるよ

嬉しそうにはしゃべ彼女を見ていると、思わず口元が緩む。

“ じつやあ、あの店員さんにお礼を言いに行かなきやな。彼女も連れて”

思わぬサプライズに、俺まで嬉しくなった。

「……愛してるよ」

「…………んっ…………ん…………ふう…………っ…………」

俺は深く口付けた。舌をゆっくりと絡ませ、唇に吸い付く。彼女は甘い吐息を漏らしながら、俺の背中に腕を回し、しがみついた。

「んん…………んっ…………」

彼女の指に力が入るほど、俺は激しく舌を動かす。もつと、俺を感じて欲しいから。

「ちゅっ……んん……ふあ……」

胸を離すと、とろんとした目で彼女が俺のことを見ていた。

「続きは寝る時に、ね?」

「……うん」

胸に顔を埋める彼女を、そつと抱きしめた。

これから沢山時間はある。甘くて美味しいチョコレートタルトに舌鼓を打ちながら、これから先のことをほんやじと考えていた。

そのチョコレートタルトに、負けず劣りず甘い生活になるだらう日々を。